

むすびにかえて 今後の展望

相克と混迷の度合いを深め、あらゆる事柄における不確実性がとみに高まっている今日を生きる若者たちにとって、「自分はこうなっているだろう」という未来のイメージを抱くことは非常に難しい。社会と世界を見渡せば、単純に解決することができる問題は一つも見当たらないし、超越的な一個人、一組織、一つの国家の関与によって解決する課題も一つとしてないといっていよう。

そのような現実直面に直面するからこそ、互いに違った人々と良い関係を作りながら共に働き、大きな見通しをもって行動し、さまざまなツールを活用する能力がいよいよ必要になってくるのは疑いを容れない。

日本の戦後教育を振り返ると、経験主義と系統主義の潮流が何度か入れ替わっている。近年は上へのべたような切実な問題関心から、再び経験主義が見直されてきているようにも思える。しかし、経験から学び、探究し、問題解決をはかることと、系統的な知識や技能とは、どちらも結び付けられることによって初めて生かされるのである。このような学習活動を構築することは、経験主義か系統主義かという二者択一の発想を止揚する。その意味でキー・コンピテンシーとは、成人教育ないし生涯教育というパースペクティブにおいても、極めて有用な能力観であるといえる。

心身の成長が著しく、多感な中高生の時期に、このような教育の機会が与えられることは、個人の社会的成功のみならず、共生の観点に立って、持続可能な地球社会をつくる責任を自覚し、行動する市民を育てるために、非常に重要である。中高一貫教育校では6年間かけて文字通り一貫した方針のもとで教育活動を展開することが可能である。わけても本研究が対象としたプロジェクト型宿泊研修を中高生の発達段階に応じて実施することは、中高一貫教育校だからこそ可能となる。こうしてプロジェクト学習が各教科における探究的な授業に影響を与え、教科指導と総合的な学習との相互作用のもと、学校内に「探究的な文化」が満ち満ちることになるであろう。

本研究の過程で、本校の実践の課題も明らかになったが、それ以上にプロジェクト型宿泊研修がキー・コンピテンシーを育てるために有益であることを確信した。本学院においては、中高大一貫教育を視野におきつつ、研究成果を共有し、課題点を修正し、実践力の向上と生徒の学習のさらなる充実を果たしてゆきたい。そして、本研究が日本の中等教育、なかんづく中高一貫教育校の教育を裨益するものとなることを願ってやまない。